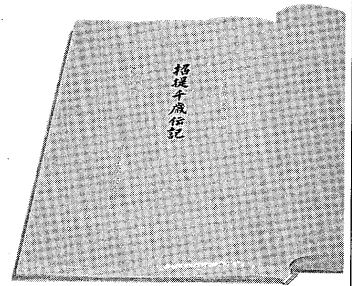


関口静雄・山本博也編著

唐招提寺・律宗戒学院叢書

第一輯『招提千歳伝記』

阿部泰郎



2004年2月15日発行
昭和女子大学近代文化研究所
A4判 232頁
定価10000円(本体)

仏教の根幹は戒律にある。いうまでもなく、受戒は出家して比丘を指すものにとって欠くべからざる階梯であり、布薩は僧伽を維持することに於いて必須の営みであり、そして戒壇こそは僧宝具足を証明する為の聖域であった。

にもかかわらず、日本の仏教が戒律を軽んじて久しい。あながち近代以降の風潮を指すばかりでなく、既に中世、その独自の展開の画期であった鎌倉時代の祖師たちが創唱した仏法においても、こと戒律の側面は殆ど注目されていないのが実情であろう。そのなかでは、僅かに叡尊・忍性らによる律僧たちの「興法利生」の事蹟が旧仏教側の運動として注目されるに止まった。そうした中世における戒律復興とは何であったのか。その意義を問うことは、そのまま、日本仏教史ないし思想史における戒律の意義を解き明かすことに通ずるものだろう。そのためには、戒律に関する資料の発掘と整備、研究の基本となる史料の良質なテク

ストを学界へ提供することが急務である。

このたび、昭和女子大学近代文化研究所では、「唐招提寺・律宗戒学院叢書」の公刊を企てられ、その第一輯として、関口静雄・山本博也両氏の編著になる『招提千歳伝記』が刊行された。戒学院所蔵の寛延元年（一七四八）元鏡書写本が選ばれ、影印・翻刻・解題が完備される。その影印において原本の趣を良く示し、その忠実な翻刻を下に掲げて読者の便としている。一箇のテクストの全貌を周到に再現した、史料集として、贅沢で理想的な形態である。『招提千歳伝記』がこの叢書の第一冊に採られたのは、おそらくそれが戒律一般にとってのみならず、唐招提寺にとって、単なる史料という以上に、記念碑的な意義を有する著述であるからであろう。

天平のいにしえ、鑑真によって戒律が本邦に伝えられてより、その止住の寺として創建された唐招提寺は、戒律の本所としての伝統を今に保ち続

けている。しかし、その法燈は平安の末に至り衰退はなほだしい有様となって、実範による一老僧からの伝授で辛うじて命脈を保ち、鎌倉初めの貞慶による釈迦念仏会の創始、そしてその衣鉢を継ぎ叡尊と俱に自誓受戒し戒律復興の運動を発起した覚盛が入寺することによって、中世に再び興隆を迎えた。今に遺る「天平の覺」もこの時の改修を経なければ存在しなかったであろう。その唐招提寺が、近世に入り、元禄年間に今度は徳川幕府による、時の將軍綱吉とその生母桂昌院の莫大な助成によって、根本的な修理と再営がなされたのである。この元禄の唐招提寺興隆は、それを記念するための寺誌であり、かつ律宗史ともいべき歴史叙述としての僧伝集成である『招提千歳伝記』を産み出すことになった。

元禄十四年（一七〇一）に十余年の歳月を経て完成した本書は、太祖鑑真来朝より千歳を閲することを銘記して命名された。全九巻三部十九篇と系図からなり、前半は列伝の体裁で唐招提寺歴代の住持の伝と、広く律宗を興行した僧俗の伝を載せ、後半は寺誌の体裁を以て講堂伽藍の沿革と伝承、寺宝・仏像の由来と法会儀式、院家と末寺、寺領等を記録し、末に著者が編纂にあたり先行文献の訂すべき箇所や疑問について史書・記録を参照して考証している。かくも総合的な史書として

の『招提千歳伝記』の撰述は、自序によれば、直に名指さないものの、元禄二年（一六八九）に刊行された慧堅による『律苑僧宝伝』が契機となつたようである。それに律の本所たる唐招提寺一門の「古徳」の伝が少なく、未だ詳らかでないことを、必ずしも作者の非とはしない。しかし「我門」ならでは知らざる故として、後半の弁訛篇でその誤りを指摘しているなど、始終對抗意識を示しているように、却って自らの伝記の編述に赴く強いうながしとなつたのである。

また、一方で範を仰いでいるのが『元亨釈書』である。この、僧伝集成による日本仏教史ともいふべき大著を、伝を叙し賛を付すという、その叙述の形式まで踏襲すると同時に、随所で参照しており、『律苑僧宝伝』と同じく先行する著述の枠組みに抛りつつもそれに抗して独自の展開を求めようとする志向を生々しく示している。右の二本以外にも、多くの文献が参照され書名を挙げてその所説が校量されており、そうした考証的な面は本書の一大特色といえよう。特に「撰述篇」を立てて律宗先徳の著述目録を掲げるところに、それから律宗文叢の精粹たらんとした本書の面目がある。その志は遙か後世の徳田明本師による『律宗文叢目録』に受け継がれるものであろう。

編者と校訂者の労苦の賜である訓も忠実に再現

された『招提千歳伝記』をあらためて再読して、多くの発見に導かれた。たとえば、伝記中には、古土篇の末に慈禅上人伝が収められる。慈禅（有蔽）は、覚盛・叡尊・円晴と俱に自誓受戒を行つた同志の一人であった。しかし、彼だけは具戒を捨て、斎戒のみを保つて西方・妙香の二院に居したという。戒律復興の主役となつた覚盛の陰に隠れて、斎戒衆という低い身分で寺辺に住し、葬送などに従事した俗聖的存在に慈禅が連なつたことは、細川涼一氏の注目するところであつた（『中世律宗寺院と民衆』）。伝は「其両院。至于今人法繁昌也」と結ばれるが、そのうちの西方院こそ、元禄の唐招提寺復興の陰の主役、外護者桂昌院と綱吉の帰依僧として権を振るつた護持院隆光の出た寺なのである。殿堂篇の別院、西方院条に銘記する隆光への際立つた謝辞と併せて、『招提千歳伝記』がひそかに繋ぐ因縁の糸は、自ずとその成立の消息を浮きあがらせているようである。

『招提千歳伝記』は既に『続々群書類従』や『大日本仏教全書』に翻印収載されて、それらにより世に知られてはいるのだが、その底本は何れも時代の降る末流の書写であつた。解題は、今回の底本となつた元鏡（本書の続篇たる『千歳伝統録』の撰者）による写本の卓越した価値をはじめとして、その伝来、諸本の関係、また本書の構成

や出典、そして撰者義澄や筆者元鏡の行実など、周到に『招提千歳伝記』の全体像を示している。更に、その依拠資料の一つと思しい新資料（『招提寺尼受戒次第』）の紹介など、あらたな知見を拡げてくれる。考証の一環として、彼らの写した『声明集』や訓伽陀譜の存在に注目するのは、元より唐招提寺が戒律の実践において声明を重んじ、法会のなかで訓伽陀を伝承していた伝統に想いを致す編者関口静雄氏の文芸研究の余録であろう。

関口氏には、既に昭和女子大学創立八十周年記念「唐招提寺展」開催記念『律苑僧宝小誌』（二〇〇〇年）があり、鑑真已下戒律を伝えた人びとの伝記を中心に一篇の律宗史を叙した味わい深い好著である。それには縦横に研鑽の蓄積が盛り込まれて、再三読み返しては学恩に浴したのであつたが、その氏による今回の史料集の公刊も信頼に足る仕事であることは疑いの無いところである。本書が刊行される今春は、鑑真来朝より一千二百五十年という記念すべき年にあたる。これを皮切りに続々と調査・研究の成果を世に出されることを願うとともに、平成十二年の戒律文化研究会の発足など、戒律研究の機運の高まりにも時宜に叶つた出版であることを特に記して筆を置く。

（あへ やすろう 名古屋大学文学研究科教授）